

ローシー・オペラ 歌劇『椿姫』

中 野 正 昭

資料概要

本稿は、ジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ローシー (Giovanni Vittorio Rosi) 一八六七年一月一八日―没年不詳) が主宰したオペラ団「ローシー・オペラ」が、ローヤル館で上演した「歌劇『椿姫』」(ヴェルディ作曲、小松玉巖訳) リブレットの翻刻である。

イタリア生まれの舞踊家・振付師・演出家のローシーは一九一二(大正元)年八月に帝国劇場に招かれて来日、同劇場の歌劇部の指導者として洋舞とオペラの指導を行った。日本に於ける歌劇運動の牽引者として期待されたが、

時期尚早もあってか興行的には振るわず、一九一四(大正三)年五月に帝劇は歌劇部と管弦楽部を合わせて「洋劇部」と改称しオペレッタなど大衆的な音楽劇へと興行方針を転換する。が、これも興行的な成功を収めるには到らず、一九一六(大正五)年五月、洋劇部は解散となった。同年一月、帝劇との契約満了を迎えたローシーは、東京・赤坂にあった映画館「万才館」に私財を投じて改装・改築し洋劇専門の小劇場「ローヤル館」(一説には日本で唯一の「オペラ・ハウス」の看板を掲げていたとされる)を新設、元帝劇歌劇部メンバーと共に私設劇団でのオペラ・オペレッタ興行を開始する。ローヤル館ではほぼ毎月一作品を定期上演したが、やはり興行的な安

定には遠く、一九一八（大正七）年二月の『椿姫』を最終公演に解散した。本稿はこの最終公演のリブレット翻刻である。

リブレットは簡易製本で、縦二二・五センチ×横一五センチ、表紙を別に全二八頁となっている。表紙【図版1】には次のように表題他が記してある。

LA TRAVIATA
BY
G. VERDI

小松玉巖訳

歌劇 椿 姫

大正七年二月二日

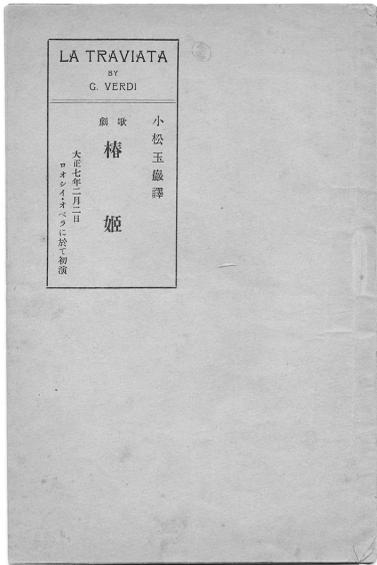
ロオシイ・オペラに於て初演

公演初日は二月二日で、終日は新聞広告によれば二五日となっている。作品名は日本語と原題のイタリア語で併記されており、これは最後に資料として付したプログラム（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵）も同様の形をとっている。プログラムには「大正七年二月一日ヨリ毎夕八時開演」と記されているが、新聞広告から判断するに初日はリブレットにある「二月二日」が正しいよ

うだ。

一般的に「ローシー・オペラ」「ローシーのオペラ」「ローシー・オペラ・コミック」「ローヤル館」など様々な名称で呼ばれたこの劇団の正式名が「ロオシイ・オペラ」（本稿では「ローシー・オペラ」と表記）だったことが分かる。劇場名は新聞広告などから「ローヤル館」が正しいようだ。

翻訳者「小松玉巖」は音楽家小松耕輔（一八八四—一九六六）の筆名で、小松は作曲に「小松耕輔」、作詞に「小松玉巖」、翻訳や創作に「若松美鳥^{みどり}」の名前を使って

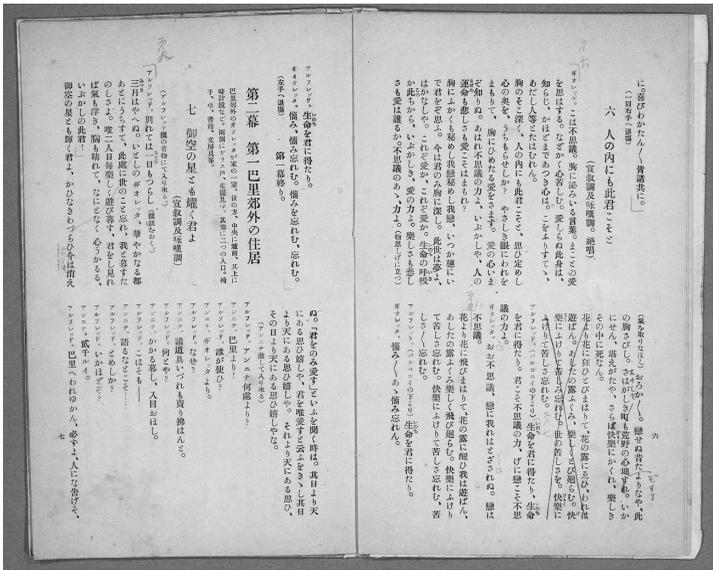


図版 1

いる。本来であればローシー・オペラ『椿姫』の翻訳は若松美鳥名義である筈だが、記載は「小松玉巖訳」となっている。小松が若松美鳥名義で本格的にオペラの翻訳を行うのは、この後の浅草オペラ時代からのことなので、この時はまだ筆名が定まっていなかったのかも知れない。

本リブレットは小松耕輔旧蔵品で、現在は長女の田中みや子氏が所蔵されている。本文には小松自身の手によると思われる鉛筆のメモ書きが所々にある【図版2】。

書き込みの大半が誤字の修正と訳の訂正である。一部に歌・音楽の指示に関する書き込みもあるが、これがローシー・オペラ時代のものか判然としない。というのも、小松はこの翌年に『椿姫』の再訳を行っているからだ。翌一九一九（大正八）年一月に浅草の日本館で「オペラ座」が上演した『椿姫』で、小松は新たに翻訳（若松美鳥名義）を起すと共に、浅草オペラ向きに脚色を行っている。更に翌一九二〇（大正九）年夏に「東京オペラ座（オペラ座から改組）」が『椿姫』の関西公演を行った際には、オペラ座の脚本の一部に手直しをしている。どちらとも検閲台本が残っており、それらから判断するに、リブレットの書き込みはオペラ座用に翻訳・脚色を行った際のメモ書きだった可能性が高い¹⁾。



図版 2

表紙の見返しには一頁を使って配役が、奥付には住所他が記されている。

【表紙見返】

ヴェルディ作

歌劇 椿 姫 (La Traviata) 三幕四場

指導……………ジー・ギイ・ロオシイ氏

訳詞……………小松玉巖氏

背景製作……………石川伊十郎氏

音楽指揮……………篠原正雄氏

登場役割

ギイオレツタ……………安藤文子嬢

フロオラ……………岡村文子嬢

アンニナ……………井上起久子嬢

アルフレッド……………田谷力三氏

ジエルモン……………茂木信夫氏

ガストン……………堀田金星氏

男爵ドゥフォール……………川合想世氏

侯爵ドビニイ……………茂木信夫

医師グレンゼル……………茂木信夫

大正七年二月二日東京ロオシイ・オペラに於て初演

【奥付】

大正七年二月二日印刷

大正七年二月四日発行

禁無断興行

東京市本郷区西片町拾番地

版權所有者 小松耕輔

東京市赤坂区伝馬町一丁目一番地

発行者 ジイ・ギイ・ロオシイ

府下豊多摩郡淀橋町角筈八百五十六番地

印刷者 高橋勝雄

東京市赤坂区伝馬町一丁目一番地

発行所 ロオシイ・オペラ

印刷日が初日と同じ「二月二日」で、発行日が「二月四日」となっているが、これが表記ミスなのか、別の理由によるものかは不明である。

小松耕輔の回想によれば「十二月七日にローシー氏から『トラヴィヤタ』を上演したいから訳詞を頼むとのこと、これを引受け昼夜兼行で訳し十二月三十日に脱稿

してこれをローシーに届けた」とあり、翻訳に約一ヶ月、脱稿から上演まで約二ヶ月間あったことが分かる。

リブレット本文は登場人物と詞の間を句点「。」で区切る形式で、訳は文語調となっている。ローシー・オペラは基本的に小林愛雄の訳で上演されており、小松が手掛けたのは『椿姫』のみなので、他のローシー・オペラでもこうした堅い訳詞が使われたかは不明である。ただしリブレット上の表記に関しては、例えば「明日は明日の日、いざたのしまむ」「明日は明日の日いざ楽しまん」のように繰り返しの際にひらがなと漢字で表記を変えるなど読みやすさを考慮したと思われる工夫がある。

なおリブレットには「宣叙調」としてレクタティヴォが指示されており、この通りに上演されたとすれば、ローシー・オペラの声楽技術は当時の日本ではかなり高い水準のものだったと推測される。

凡例

- 翻刻はフリガナを含め総て行った。
- 漢字は旧字から新字に改めた。
- 人名、台詞の一部に表記の不統一があるが、底本のまま翻刻した。誤字脱字もそのまま翻刻し、必要に

応じて翻刻者の注記を「」で補った。

歌劇 椿 姫 (La Traviata)

小松玉巖訳

第一幕 ギオレッタの客間

一 序 曲

中央に入口、其処より他の部屋へゆける。両側に炉前、上に鏡、部屋の中央に立派に御馳走の用意ある卓。ギオレッタ、ソファに座して医者や其他数人の友人と話しをる。其他の人達は御客を迎へてゐる。お客の中には侯爵男爵打交りをり、侯爵の腕にはフロラ倚りかゝりをる。

二 時はすぎぬ (序 歌)

合 唱。時は過ぎぬ。何故おそきぞ？

ギオレッタ。フロラがため、われら遊びすぎぬ。フロラよくぞこゝへは来つる。(客を迎へる為前へ進む) いざ楽しく遊ばん。酒のみすこされよ。

フロラ及侯爵。御機嫌はいかが？

ギオレッタ。そはなせ。この医師のみぞ病はいやせ。噫、我等楽しまん。

フロラ外一同。楽しや我等。おゝ楽しや我等。

(ガストン。アルフレッドと共に入り来る)

ガストン。おゝアルフレッド、ジエルモン。君をあげめうやまふ男の子よ。愛にも名にも身を捨つる。

ギオレッタ。よくこそは来つれ。(アルフレッドと握手す)
(此の間に僕等卓の仕度をとゝのへる。侯爵アルフレッドに。)

侯爵。聞けアルフレッド。

アルフレッド。これこそ(握手する)

ガストン。それよ美しき女神の住居!

(ギオレッタ、僕等に向ひ)

ギオレッタ。よきかや

(僕等は、よろしといふ様子をする)

ギオレッタ。いざや席へ。よろこびをつくしませ。合唱。まことや酒にぞ憂ひも悲しみも忘る。

(皆々席にや(「つ」くギオレッタは、アルフレッドとガストンの間に、其の反対の方、男爵と侯爵との間にフロラ着席する、其の他は思ひ思ひの処に)

ギオレッタ外一同。喜びをつくしませ。

ガストン。(ギオレッタに始めは囁きやがて話す) アルフレッド。思ひ恋がる

ギオレッタ。うそよ——

ガストン。毎朝君をば尋ねて恋ひわぶる。

ギオレッタ。我はそをば知らじ。

アルフレッド。何とよ?

ギオレッタ。(アルフレッドに) 誠かそれは、きかせよ。アルフレッド。まことぞ!

ギオレッタ。(アルフレッドに) 友よ嬉しや。(男爵に)

パロンよおもひありや!

男爵。我らの知りしは或る夏よ。

ギオレッタ。我らの知りしは今宵なり!

フロラ。思ひ出は語らぬぞよき!

男爵。(フロラ傍唱) 好かぬ男の子よ。

ガストン。(アルフレッドに) 語らじと誓へりや。

侯爵。(ギオレッタに) その誓ひ破りてよ。

ギオレッタ。(アルフレッドの盃を満す) 否そのまゝに!

アルフレッド。君はいともよき人——

フロラ外一同。あげん、盃を!

ガストン。パロンよき歌うたへよ、諸共によき歌うたはん。

一同。いざ歌へや。

アルフレッド。うたふはつらし。
ガストン。何とてつらきぞ。

アルフレッド。(ギオレッタに) のぞみか？

ギオレッタ。おゝ！

アルフレッド。おゝ、うたはん！

侯爵。静かに！

一同。いざ歌きかん。

三 楽し、喜び歌うたふ時

(酒の歌)

アルフレッド。楽し、喜び歌うたふ時。時をば忘るよ。盃
を花もてかざらん、いざ。若き心は君ゆえにぞをどり、
わなゝく。(ギオレッタを指しながら)

此の喜びいざや、命は短かし——

ギオレッタ。(立ち上り) 我世はうつゝの夢とさめはてゆ
くなり。さればよ歌ひ興せめ、今この時を。楽しめ、
足はやくうつりゆく花の一時。なげかじ、今この時を
楽しまん。此の命！

フロラ、ガストン及合唱。いまこの時を楽しまん。恋と酒
とに酔ふ時は、心も胸も春の風！

ギオレッタ。(アルフレッドに) 世は快樂のみ！

アルフレッド。(ギオレッタに) 恋しらぬかぎり——

ギオレッタ。(アルフレッドに) 恋はきはみなし。

アルフレッド。(ギオレッタに) ひとりのみ思ふ。——

一同。恋と酒とに酔ふ時は、心も胸も春の風。噫、春
の風。噫、春の風。

四 君を初めて見てし時

(ワルツ及二部合唱)

一同。(向ふの部屋より音楽きこえくる) なにぞ？

ギオレッタ。なほも踊り舞ひ遊べ。

一同。あゝよき曲節……いざや共に！

ギオレッタ。いざ共に。(一同が中央の戸口に達した時に、

ギオレッタは急に色を失ひ、叫ぶ。) あら！

一同。いかに？

ギオレッタ。(何でもないと言ふ様子をして一同を案内す

る) いざく

一同。いかにせし？

ギオレッタ。(二三歩あるかうとして) とともに！(歩くを
得ずして止まる) 苦し！

一同。なにと？

アルフレッド。そのもだへ！

一同。おゝいかに？

ギオレッタ。癒えんく、やがて（内側の部屋を指して）

ゆけ、われもあとよりゆかん。

一同。さらばゆかん。（アルフレッドをのこして一同他

の部屋へゆく、ギオレッタ登場、鏡を見る）

ギオレッタ。蒼白あをさよ！（ギオレッタふりかへりてアル

フレッドを見付ける）おゝ！

アルフレッド。はやも治まれるか？

ギオレッタ。よろし。

アルフレッド。世の宴会うたげ、身を殺すさらば君よ、つゝしみ

ませや。

ギオレッタ。いかにして？

アルフレッド。永久とほに守らん、我胸のうちなる君。永久とほに

守らん。

ギオレッタ。何と！ 愛する人もなし。

アルフレッド。（熱心に）愛人ひともなしといふや？

ギオレッタ。さなり！

アルフレッド。我こそ思へ！

ギオレッタ。かゝる深き思われ知らじ アハハハ（笑ふ）

アルフレッド。情しらざるか？

ギオレッタ。そは、ともあれ、などかくは問ふ？

アルフレッド。心あらばかくはいふまじを！

ギオレッタ。まことかや？

アルフレッド。真心より！

ギオレッタ。かねてよりのことか？

アルフレッド。一年ひととせがほど思ひわずらふ。君をはじめて見

てし時、嬉しき胸にあふれぬ。愛は奇し、命いのちの源もと。愛

よ愛よ奇しき愛。汝おまがいぶきかかる処、物皆生く天地

の命よ！

ギオレッタ。眞実まことならば我を許せ。我はたゞ朋友ともとして

君を愛す。楽しみの方に我は生く。唯友として君を愛

す。

アルフレッド。我を愛さぬか？

ギオレッタ。楽しみの方に生く。

アルフレッド。不思議の力、いま――

ギオレッタ。さらばよく。

ギオレッタ。わすれん、間もなく。

アルフレッド。我をば悲しみに導く。

ギオレッタ。さらばよ我を忘れよ、忘れよや。間もなく

忘れん、あゝさらばく。

アルフレッド。あはれ悲しや心乱るゝ。不思議の力よ。あゝ、恋は光り！

ガストン。(戸口にて) なほ此処にてか？

ギオレッタ。わけもなく！

ガストン。そのまゝ。さらば。(帰りゆく)

ギオレッタ。語るな最早——そは誓ひか？

アルフレッド。従はんさらば。(ゆきかける)

ギオレッタ。行き給ふか？(女は胸より椿の花をとりて)

しばしこの花を——

アルフレッド。なに？

ギオレッタ。あづけおかん。

アルフレッド。あゝ(女の方による)

ギオレッタ。しばまば返せ。

アルフレッド。嬉しあした明朝！

ギオレッタ。よし、あした！

アルフレッド。(感きはまりて花をとる) たうとき、しる

し——

ギオレッタ。我を思ふか

アルフレッド。云へじく我心！

ギオレッタ。思ふとや

アルフレッド。嬉しきしるし。

ギオレッタ。我を思ふか。

アルフレッド。云へじく我心。

ギオレッタ。思ふとや(アルフレッドゆきかける) ゆく

か？

アルフレッド。(女の方に帰つて来て手にキツスをする)

さらば！

ギオレッタ。さらば！

アルフレッド。はやとはず！

ギオレッタ。さらばく。

五 見よや旭は今さし初む

(フロラ外一同と帰り来る。舞踏の爲めに体が熱してゐる)

一同。見よや旭はいまさしそむ。いざわかれん。ねむりて世のこと我等忘れん。見よ日はのぼりぬ。見よ日はのぼりぬ。いざ帰らん。いざく帰らん。ねむりの床にてつかれをやすめん。つかれをやすめん。礼をば申さめ宴うたげの礼を。楽しみわかたんいづれも共に、楽しみわかたんいづれも共に、あゝいづれも共に。喜びわかたんく皆諸共に。

(一同右手へ退場)

六 人の内にも此君こそと

(宣叙調及詠嘆調。絶唱)

ギオレッタ。こは不思議。胸に沁みいる言葉。まことの愛を思はする。などかく心苦しむ。愛しらぬ此身は、知らじ、かほどまであつき心は。こをふりすて、あだし人等とたはむれん。

胸のそこ深く、人の内にも此君こそと、思ひ定めし心の奥を、うちもらせしか？ やさしき眼にわれをまもりて、胸にひめたる愛をさます。愛の心いまぞ知りぬ。あはれ不思議の力よ、いぶかしや、人の運命きだめも悲しさも愛こそまもれ？

胸にふかくも秘めし我恋秘めし我恋、いつか穂にいで君をぞ思ふ。今は君のみ胸に深し。此世は夢よ、はかなしや。これぞ愛か、これぞ愛か。生命いのちの呼吸いきか此ちこのから、いぶかしき、愛の力よ。楽しさも悲しさも愛は護るか。不思議のあゝ、力よ。(物思しげに立つ)(氣を取りなほし)おろかく。恋せぬ昔たよりなや、此の胸さびし。さはがしき町も荒野の心地すれ。いかに

せん、堪えがたや、さらば快樂けつらくにかくれ、楽しきその中に死なん。

花より花に狂ひとびまはりて、花の露にゑひ、われは遊ばん。あしたの露ふくみ、楽しくとび廻らむ。快樂けつらくにふけりて苦しみ忘れむ。世の苦しさを。快樂けつらくにふけりて苦しさ忘れむ。

アルフレッド。(バルコニーの下より) 生命いのちを君に得たり、生命いのちを君に得たり。君こそ不思議の力、げに恋こそ不思議の力よ。

ギオレッタ。おお不思議、恋に我れはとざされぬ。恋は不思議。

花よ花に飛びまはりて、花の露に醒ひ我は遊ばん、あしたの露ふくみ楽しく飛び廻らむ。快樂にふけりて苦しき忘れむ。快樂にふけりて苦しき忘れむ、苦しきく忘れむ。

アルフレッド。(バルコニーの下より) 生命いのちを君に得たり。ギオレッタ。悩みくあゝ悩み忘れん。

アルフレッド。生命いのちを君に得たり。ギオレッタ。悩み、悩み忘れむ。悩みを忘れむ、忘れむ。

(左手へ退場) 第一幕終り。

第二幕 第一巴里郊外の住居

巴里郊外のギオレッタが家の一室。後の方、中央に炉前、其上に時計鏡など。両側にガラス戸、花園見ゆ。其他に二つの入口。椅子、卓、書籍、文房具等。

七 御空の星とも耀く君よ

(宣叙調及詠嘆調)

(アルフレッド獵の着物にて入り来る。)

アルフレッド。別れては一日もつらし(獵銃をおく。)

三月はやへぬ。いとしのギオレッタ、華やかなる都あとにうちすて、此処に世のこと忘れ、我と暮すたのしさよ。唯二人日毎楽しく遊び暮す、君をし見れば気も浮き、胸も晴れて、なにとなく心うかるる、いぶかしの此君!

御空の星とも輝く君よ、かひなきわづらひ今は消えぬ。

「君をのみ愛す」といふを聞く時は。其日より天にある思ひ嬉しや、君を唯愛すと云ふをきゝし其日より天にある思ひ嬉しや。それより天にある思ひ、その日より天にある思ひ嬉しやな。

(アンニナ激して入り来る)

アルフレッド。アンニナ何処より?

アンニナ。巴里より!

アルフレッド。誰が使ひ?

アンニナ。ギオレッタより。

アルフレッド。なぜ?

アンニナ。諸道具いづれも売り払はんと。

アルフレッド。何とや?

アンニナ。かかる暮し、入目おほし。

アルフレッド。こはそも——

アンニナ。語るなとこそ……

アルフレッド。とめしか?

アルフレッド。いかほどぞ?

アンニナ。忒千ルイ。

アルフレッド。巴里へわれゆかん、必ずよ、人にな告げそ、その負債われつぐなはん。いで(アンニナ退場)あだ

にぞ過せし楽しき日頃、見はてぬ夢と消えしかなしき。

負債はわれこそつぐなはん、われこそ。明日の日のあけぬまに、つぐなはん、あだにぞ過せし負債を、われこそつぐなはん。負債をわれこそつぐなはん。さらばわれこそ。明日の日のあけぬまに。

あだにぞすぎせし樂しき日頃、見果てぬ夢と消えし悲しき。負債おいめはわれこそつぐなはん、われこそ。あすの日のあけぬまにつぐなはん。あだにぞ過せし負債をわれこそつぐなはん、負債を我こそつぐなはん。さらば我こそ。明日の日の明けぬ間に、さらばつぐなはん。いざ／＼つぐなはん。(退場)

八 薔薇のごと美しき我子

(宣叙調及二部合唱)

(ギオレッタ紙を手にして入り来る)

ギオレッタ。アルフレッド?

アンニナ。只今巴里へ——

ギオレッタ。いつまで?

アンニナ。明日の朝まで、ひそやかに。——

ギオレッタ。いぶかし。

ジョセフ。(入り来り手紙をギオレッタに出す)これ——
ギオレッタ。よし(座しながら)見知らぬ人尋ね来なば

すぐ此処へ。

(アンニナ、ヨセフ退場ギオレッタ手紙を開く)ハハ、
フロラ隠家知りしか。今宵のまとゐに来よとか。

(手紙を机の上になげ)そはあだごと。

ジョセフ。マダム、此方こなた!

ギオレッタ。わがまつ人!(ジョセフに其人を入れよと

指示す。)

(ジェルモン入場)

ジェルモン。マダム、バレリイか。

ギオレッタ。さなり。

ジェルモン。我はアルフレッドの父ぞ。

ギオレッタママ。(ギオレッタ驚く。すはれといふ身振りをす

る。)おゝ。

ジェルモン。(座す)われは父、彼と住まば身の破滅ぞ。

ギオレッタ。(憤りを以て立上る)此処は我屋ぞ、静に、

わらはは女。御身の為ぞ(ゆきかけて)

ジェルモン。なにと、マダム?

ギオレッタ。思ひちがひぞ、(帰り座す)

ジェルモン。彼はすべてを与へん。

ギオレッタ。我は何ももらはず。

ジェルモン。(見まはす)これらはいかに?

ギオレッタ。(ジェルモンに紙を与へる。)君にのみ此を

見せん君にのみ——

ジェルモン。(ジェルモン読む)おゝ何事、汝がもの皆、

つかひはたすか御身はそをくやまぬか。

ギオレッタ。いないな、(熱心に) 唯われは、アルフレツドのみ愛す、神もゆるせ。

ジェルモン。崇高き心、

ギオレッタ。お、我がため、やさしの言葉、

ジェルモン。(立上り) 折入りて願ひの筋あり。

ギオレッタ。いな、恐ろしの犠牲、いまぞ、我身にかか
る。――

すぎし日恋し。

ジェルモン。汝が心ひとつにて、我子二人助からん。

ギオレッタ。二人の子?

ジェルモン。お、薔薇の如、美しき子をば我もてり。

幸ある幾日静に過ぎぬ。愛しの乙女よき希望もてり。

さるを君は我子の望をやぶりぬ。

若しもかく二人此処に住まば、娘は永久に契るを得ず。

我望かなへよ、わが望かなへよ。

ギオレッタ。あゝ、別れてとか。君が妹娘、祝婚の日ま

で。悲しや、しかはあれ……

ジェルモン。必ずよ。

ギオレッタ。あゝ、その言葉、われたへじ。

ジェルモン。たのみぞ、

ギオレッタ。永久の別れといふにか。

ジェルモン。さなり、

ギオレッタ。あゝ、いな。いかばかり我恋ふと、君は

知らじな、おちこは 父兄 はらなか 兄弟 我には何ぞ、かの君のみぞわ

れを護る。君は知らじ 此身は病気に、日毎やつれゆ

く、はかなき此身ぞ。いかにいふとも、彼とは別れじ、

別るるよりは死をば望まん。別るゝよりは死をこそ。

噫。死をこそ望め、噫死をこそぞめ。

ジェルモン。重きは犠牲、さはれ聞き給へ。花とてもや

がて散るを。

ギオレッタ。はや云ふな、誰を愛すべき。われは唯アル

フレッド。

ジェルモン。うつるは男心としらずや。

ギオレッタ。いかにせん(思ひ乱る)

ジェルモン。時の力には花もうつろひ、香も失せぬべし。

さすればいかに年月ふるとも心は休まで、二人の契り

を神も人もろはん。

ギオレッタ。悲しくく。

ジェルモン。空しき夢をばとくなげすてよ、

ギオレッタ。悲し! おゝ!

ジェルモン。幸多き子等がため、護りたれ。早や〜答

を聞かせ給へ、神の御心よ神の御心よ。かく云ふは神の心！

ギオレッタ。(悲しさの余りに) っらしや。望みはたへぬ。わが望、君はうばひぬ。神さへゆるせしこと、ゆるされず、すべなし、いかにせん、人、つれなしいかにせん。

ジェルモン。我が子の為に、わが子の為に、おもひすてよ。我等が為に思ひすてよ、思ひすてよや。

ギオレッタ。許されず、いかにせん(泣きながら) かへりて云へや汝が娘に。望みすて、我はひとり、世にさすらひ涙もかれはて、さびしくも世に経め、君がために、

ジェルモン。君が言葉悲しや、君が言葉悲しや、胸のうち悲しからむ、胸のうち悲しからむ、我も亦いと悲し。

君が心、神もしらむ、良き君！

ギオレッタ。帰りていへや君が娘に。希望すて、われはひとり、世にさすらひて我や経ん。

ジェルモン。心のうちは、われもよくしる、苦しき胸はわれよく知りぬ。我も悲し、あはれ君、けだかき君よ、許せや、君が言葉悲し、気高き君よ許せ。

ギオレッタ。望みすて、われや経ん、楽しき望みも君

ゆゑ捨てはてん。

ジェルモン。悲しき言葉よ、君が心悲しや、君がやさしき心、神も守らむ。

ギオレッタ。いかにせん？

ジェルモン。愛さぬといへ。

ギオレッタ。信ぜず。

ジェルモン。すてよ。

ギオレッタ。たづねん。

ジェルモン。いざ。

ギオレッタ。抱けく、君の娘として。(兩人抱き合ふ)

ギオレッタ。再びかれを君へと返さん。かなたにて彼を

ばまてよ(花園を指す)

ジェルモン。(ギオレッタ手紙を書かんとす、ジェルモン其を見て) なにごと？

ギオレッタ。告げなば君はとゞめなん。

ジェルモン。よき君いかにむくゆべき、いかにしてむくゆべき。

ギオレッタ。いな、死のみは我に休息やすみあたへん。かれが心にわづらひあらずな。

ジェルモン。気高きをみなよ、幸おほかれや、君が苦しき涙は神も知らん。

ギオレッタ。此苦しみは、えこそもらさじ、されども悲しや、切なる思ひ。

ジェルモン。力おとしそ、安き日も来ん、そのなさけなどあだにはきえぬ。

ギオレッタ。此苦しみは、えこそもらさじ、されども悲しや切なる思ひ、悲しや此苦み。されどかれにももらさじ、もらさじ、もらさじ此苦しみ。されど悲しや此思ひ。

ジェルモン。止めよや、なげき、そのなげき あだには消えじ、力おとしそ、安き日もこん。其なげき、あだには消えじ、君が心は神も恵まん。情ふかき君が心はあだにきえじ。

ギオレッタ。人影！ さらば……

ジェルモン。かたじけなしや

ギオレッタ。ゆけよ。——わかれん永久とには（兩人いだく）

兩人。幸くあれ。

ギオレッタ。さらば（兩人反対の戸口へ）

ジェルモン。（戸口にて）さらば——

ギオレッタ。（泣きながら）此苦しみをえこそもらさじ、

されど此思ひ——（涙にむせびて）さらば——

ジェルモン。おゝ、おゝ、さらば！

兩人。さきくあれ、さらば！（ジェルモン花園の方へ退場）

九 あな堪へがたなや

（宣叙調）

ギオレッタ。あなたへがたや（座して書く。呼鈴をおす）
アンニナ。召させしか？

ギオレッタ。おゝ、此手紙いざとく——

アンニナ。（宛名を見て驚く）おゝ。

ギオレッタ。静に！ はやゆけ。（アンニナ退場）

ギオレッタ。（再び座し手紙を書く）噫此つらき、なにと

か書きおくらばや——（書き終り封をする）

（アルフレッド入り来る）

アルフレッド。なにを？

ギオレッタ。（文をかくして）ただ——

アルフレッド。ふみか？

ギオレッタ。（どきまぎして）いな。

アルフレッド。などさわぐ？ たれにやるぞ？

ギオレッタ。きみに——！

アルフレッド。いざたまへ。

ギオレッタ。のちにぞ。

アルフレッド。噫此の氣つかはしきよ。

ギオレッタ。(立上て) などで、

アルフレッド。父きます。

ギオレッタ。あへりや？

アルフレッド。いな。これぞ父の文よ、会ひみなば、汝を

愛さめ。

ギオレッタ。(心を苦しめ) 共には行かじ。君のみ行きて

みまへに心をうち明け頼ませたまはば、必ず許したま

はん。われも君を思ひ、君も我を思へば、アルフレッ

ド、君も我を思へば。

アルフレッド。げにも……………など泣く。

ギオレッタ。涙に我が心やはらく、今は憂ひも去りて、

ほゝゑむを見たまへ。——さらば行かん。——君めさ

ば何時もみ側に。(熱烈に) アルフレッド愛せよ。我

がごと汝も。アルフレッド愛せ、わがごとなれも、

——さらばよ。(いそぎ花園の方へ退場。)

十 汝が故郷を忘れやはてし

(宣叙調及詠嘆調)

アルフレッド。たふとき心、なつかしや、(座して本を開

く時針を見る) 父はなど遅き、今日は来まさぬか。

ジヨセフ。(急ぎ登場) マダムは最早立ちさり給ひぬ。今

頃ははやパリ近し。アンニナも此処をば去りたり。

アルフレッド。おゝ。よろし。

ジヨセフ。よしとや？

アルフレッド。持物売らんと彼は行しならむ、されどアン

ニナ止めん。

(ジェルモンの花園を横切る姿が遠くに見える)

誰ぞ其影は誰ぞ、(出て行かうとする、途端に戸口に

て)

走り使のもの。アルフレッド様か、

アルフレッド。さなり。

走り使のもの。さなり。これをば君へ、さる人よりぞ、急

ぎの手紙！(走り使ひの者は手紙をアルフレッドに渡

し錢を貰つて退場)

アルフレッド。ギオレッタより何の手紙ぞ？ 急ぎ来よと

の手紙か。

あはれ、むねさわぐ（手紙をあけてよむ）「アルフレッドさらばぞ、いざ別れん！」あゝ（叫ぶ。其処に倒れんとしてジェルモンの腕に抱かる）父上——、

ジェルモン。わが子——噫泣くな、なくなよ、力をおとしそ、われにかへれ。（アルフレッド失望してテーブルの側に座し手もて顔を掩ふ）いとうるはしき汝が故郷を忘れやはてし、美くしのプロバンス。幼き其日遊にふけし、思ひ出いかに、思ひ出いかに。悲しみおほき、汝がその胸を、帰りにさらば休めよそこに。帰りにさらば休めよ其処に。御神の心ぞ、かへれや——痛める胸に汝をば待てり。痛める胸に汝をば待てり。妹も我もなれをば待てり。空しき宿に汝をばまてり。汝もし来なば喜びいかに。帰りに共に幸ひわけよ。我等と共に楽しく暮せ。御神の心ぞかへれや。御神の心ぞわが子よ。かへれやいざとくかへれ。（アルフレッドをゆりおこして）わが子！ われにひとこと。アルフレッド。くるしき、あはれ身を焼く。（父を追ひかへして）かへれや。

ジェルモン。こらへよ。

アルフレッド。（決心して）あだうたん。

ジェルモン。かへらん、いざや、いそげ。

アルフレッド。にくしや——、

ジェルモン。きけ、アルフレッド。

アルフレッド。いな——、

ジェルモン。わが言葉きかずや。——せめはせじ我子、過ぎこしことは。はや／＼ゆかん我と共に。かゝる愛は他に求め得ん。汝がためかへりていこへ、我も祈らん友も諸共、我も祈らん、友も共に、せめはせじ我子、過ぎこし方は。はやゆかん、かへりいこへ。我も祈らん友も諸共、友も共に祈らん。かへりていこへや。アルフレッド。苦しや、こらへがたや。

ジェルモン。きけよや。

アルフレッド。いな。

ジェルモン。父も祈らん、友も諸共、父も祈らん友も共に、せめはせじ我子、過ぎ来しかたは、はやゆかん。かへりいこへや。我も祈らん友も諸共、友も共に祈らん。かへりていこへや。かへりていこへや、我もいらん、諸共に、かへりていこへや、かへりて。我もいらん諸共に、かへりていこへや、かへりて。

アルフレッド。（まだ机の上にあるフロオラよりの手紙を見つけて跳り上り、それをよむ）噫フロオラが家にか、我もゆき恨みん。（氣狂ひの様につき進む）

ジェルモン。ものに、くるへるか。(ジェルモンつゞいて
追ひかけゆく)

第二場 フロオラの邸宅

フロオラの家の立派に飾りつけし一間。西側及び中央
に入口、右手の方にゲエムの卓、左手に花及び種々の馳
走をのせし卓、及ソファ等。侯爵、医者其他客大勢会話
しながら左手より登場。

十一 今宵は共に楽しく踊らん

(終曲)

フロオラ。今宵はともに楽しく踊りてあそばん。——ギ
オレッタ。アルフレッドも来らん。

侯爵。しり給はずや、二人が仲、たへはてぬ。

フロラ及医者。よもや——、

侯爵。他の君と共に来ん。

医師。楽しき二人を見しは昨夜。(右手に物の音きこゆ)

フロラ。きげや、あれを——、(人々右手にゆく。)

一同。よくぞ仮面舞踏者!

十二 よくぞジブシイさん

(ジブシイの合唱)

(あるジブシイは)手に指揮棒をもち他のジブシイ
はタンボリンをもち拍手をとる。)

ソプラノ、アルト。よくぞジブシイさん、人の身の上うら
なひめぐる。よくぞここへ。

手の筋拝見あてて見ませう、手の筋拝見。あて、見ま
せう。私の魔法はさても不思議。手の筋拝見必ずあて、
見ませう、手の筋拝見あて、見ませう。私の魔法はさ
ても不思議、手の筋拝見必ずあて、見ませう。手の筋
拝見、あて、見ませう、手の筋拝見。必ずあて、見ま
せう——お手を(フロオラの手を見る。)

合唱の一部。恋がたき汝をばせめん。

合唱の他の一部。(侯爵の手を見る)君は浮気で水心。

フロオラ。(侯爵に)猶ほも浮気か。君はうらめし、

侯爵。はや、われもたじ、あだし心。

フロオラ。きげや狼、衣を脱ぐも、心はなほも、むごき
ならひ。などて心ゆるすべきか。むごき君よ、心せよ
や。

医師及合唱。楽しきときは悲しみわすれ。あすはあすの

日いざ楽しまん。

一同。楽しきときは悲みわすれ。明日は明日の日、いざたのしまむ。いざ楽しまん明日は明日の日いざ楽しまん（侯爵フロオラの手をとる。）

十三 我等は勇敢なる闘牛者

（スペイン闘牛者の合唱）

（ガストン其他スペインの闘牛者（マタドオル。ピカドオル）に扮して右手より登場）

合唱。（第一テノルと同じく）マドリツドの都をよそに、我等は此処に来たる、花の都巴里へ、うたげ宴会の爲めにきたる、我等は、見よ闘牛者！ 勝負の話かたらん。（フロラ其他女の合唱隊と共に）いざ／＼いざとくきかせよ。手柄の話し。

ガストン其他。きけよや！ 実にピキロは世にもまれなる闘牛者！ すぐれ力は我等のほこり！ アンダルサ少女に言ひよりし時。少女は答へぬ、鼻たか／＼と。「五つの牡牛を唯一して、見事ほふらば望かなへん。」見事にほふりて帰りし時に、少女はさ／＼げぬ其真心を。フロラ其他ガストン及男声合唱。あはれ、勇ましや、我等が

闘牛者！ 喜びのみこそ我等が願ひ。

フロラ外一同。（ジプシイはタンボリンをうち、闘牛者は鎗にて地を突く、）

運がよければ女神もほゝゑむ。かけと勝負に世の憂さわする。運がよければ女神もほゑむ。かけと勝負に世の憂さ忘るる。

十四 アルフレッドか？

（終曲のつゞき）

一同。（アルフレッド登場）アルフレッドか？

アルフレッド。おゝなぜに？

フロラ。マダムは？

アルフレッド。知らず！

フロラ外二人。などひとり？ いざ／＼カルタせん。（ガ

ストンテエブルの方へ行く、アルフレッドと他のものは錢をかける）（ギオレッタ男爵の手にみちびかれて登場、フロラ彼等の方にゆく）

フロオラ。よくこそ来つれ！

ギオレッタ。嬉しき言葉。

フロラ。（男爵に）マダムをつれて君もよくこそ。

バロン。(ギオレッタに) アルフレッドぞ。見てしかか？

ギオレッタ。(傍唱) おおアルフレッド！(バロンに) 其処に！

バロン。(洪面をつくりて) 何にしに此処へ——言葉交はしそ。言葉を交すな。

ギオレッタ。(傍唱) わが来しは我が為ならず、わがためならず、(フロラはギオレッタを招き自分の側に座はらず、医者は兩人の側にたつ。侯爵は離れて男爵と会話する。ガストン切る。アルフレッド其他かけをする。又或人々はあちこちす)

フロラ。いざかけて話せ、此頃いかに？(フロラ、ギオレッタ互に語る)

アルフレッド。四よ。
ガストン。また勝ちぬ。

アルフレッド。恋にまくれればカルタには勝つ。(勝負をして勝つ)

一 同。いつも勝ちよな！
アルフレッド。勝負は勝ちよ、此命持ちゆき、けらく快樂に使はん。快樂につかはん。

フロラ。一人か？

アルフレッド。いな我れを捨てし女も、それ其処に。

ギオレッタ。あはれ！

ガストン。(アルフレッドにギオレッタを示して) ゆるせよ。

男爵。(こらへ難き怒を以てアルフレッドに) きみ！

ギオレッタ。(男爵に) こらへよきみよ。

アルフレッド。(平気に) 何とて呼ぶぞ。

バロン。(ひやかすやうに) いざや一勝負、こぼみはずまじ。

アルフレッド。よし。などこぼまん(ひやかすやうに)

ギオレッタ。いかにせん、分けまほし、事あらばいかにせん。

バロン。(金をかける) 百ルイかけん。

アルフレッド。われもかけなん。

ガストン。(切る) Aceよ。Jackよ。(アルフレッドに) 勝ちぬ。

バロン。二百？

アルフレッド。倍のかけ！

ガストン。(切る) 四よ、七よ。

一 同。アルフレッド！
アルフレッド。またも勝ちしか！

ガストン外フロラ。(アルフレッドに) 勝負はいつも君の

勝ぞよ。

フロラ。今宵の入費いりめバロンの払よ。

アルフレッド。(バロンに) つゞけむ (下僕入り来る)

下僕。したくよろし。

フロラ。いざや。

一同。ゆかん。

フロラ。いざや、(アルフレッドと男爵をのこして一同退

場)

ギオレッタ。いかにせん、わけまほし、事あらばいかに

せん。

アルフレッド。(バロンに) いま一勝負。

バロン。こよひはやめん、いつかはむくはめ。

アルフレッド。どのかけにても。――

男爵。までり。――後刻のちに――

アルフレッド。心得たり。――さらば――

男爵。さらば――(兩人退場)

(ギオレッタ大に心乱れて登場す。後にアルフレッ

ト)

ギオレッタ。此処へといひしが、アルフレッド来まさぬ

か?

いかに――いかりのため我言こきくまじ。――

アルフレッド。何とて呼びしぞ!

ギオレッタ。此処をば去れよ、身の上あやふし。

アルフレッド。いやしき女よ、恥をばしらぬか。

ギオレッタ。よくきけ。

アルフレッド。なに故ぞ。

ギオレッタ。もしやバロン――

アルフレッド。彼は我敵ぞ、唯一声にてさし殺しなば、あ

はれ汝が恋見る間にほろびて楽しみつきなむ。

ギオレッタ。若も君、かれにさされなばいかに? わが

胸わななく。

アルフレッド。殺さばよからん。――

ギオレッタ。いざとくかへりませ――

アルフレッド。若しも、君も此処より我とかへらば、我身

もかへらん。

ギオレッタ。そはかなはじ。

アルフレッド。何故?

ギオレッタ。何とか答へん、悲しや、われをば忘れよ、

命にかけたるちかひぞ!

アルフレッド。たがためのちかひぞ。

ギオレッタ。余儀なき人にぞ!

アルフレッド。男爵か?

ギオレッタ。(苦しげに) さなり!

アルフレッド。さてこそ!

ギオレッタ。かれを愛す、

アルフレッド。(はげしく戸を開き) みな来よ! (一同急ぎ入り来る)

フロラ外一同。何事。なんの用ぞ

アルフレッド。(悲しみにとざされ、辛うじてテーブルに身をさゝへたるギオレッタをさして)

二人が仲をば衆人みな知るゆゑ!

フロラ外一同。おゝギオレッタ。

一同。あゝ。――

アルフレッド。何とて愛せし 卑しき女、いまははや夢も

さめはてぬ、今迄借りたる金をば、のこらず今こそ払はん、證人の為にと人々よびしぞ、いざや払はん(フロラの腕に氣を失ひてよりかゝれるギオレッタをはげ

しき軽蔑の服にながめて財布を彼の足もとになげつく

(ジエルモン登場)

ガストン外一同。恥ちよゝゝ汝が言葉、むごき言葉、恥ち

よや。かよわき女かくまでのろひし、むごき男、ゆけ

ゝとくかへれよ、かよはき女をかくまでのろひし此男、とくゝかへれや、とくゝかへれや、かへれや、

とくとく、かへれや、とくゝかへれやかへれや。

十五 斯くばかりむごきわざ

(終曲のつゞき)

ジエルモン。(畏敵あれど怒りの顔容にて) かくばかりむ

ごきわざ、なせし罪ゆるされず、永久にわが子は失はれたり、あはれ我子、汝ははや子にあらず、汝はもはや子に非ず、子に非ず。

アルフレッド。我望たえはてぬ、恨めしや彼の女氣も狂ひ、

のぞみつゝ、死よ来れ、いざとく、わすれんとつとむれど、わすられぬわが思ひ、にくみても憎みても浮びくる、汝がさま。

フロラ、ガストン、医者、侯爵、外合唱隊。心をばたしかに、衆人も知る、汝が胸、友ゆゑに悲しみも、うさも消え

氣も晴れん。

アルフレッド。かなし、あゝ、悲しさは消ゆべしや、死よ

来れ我身に。

ジエルモン。をみなが心を、人にはもらさじ。此二人、むごけれど、さかずにあらめや。

男爵。此辱め、はらさでや、あだかへさん、すみやか

に、会ひし時われ刺さん、刃もてく刺しくれんかな
らず（以上は同時に唱ふ）。

ギオレット。（元氣なき声にて併し激せし態度にて）お、
アルフレッド、アルフレッド、知らじよな我心、真の
愛、などつらき、こらゆれど、いまははや破れなん。

一同。氣をおとしそ。

アルフレッド。望たゆ、いまはや。

男爵。いざ刺さん。

ジェルモン。いとしの心や、われのむごさ、別れはよぎ
なしよ。

ギオレット。しばし待て、時来らん、さりとは心なさよ、
悔いの日、来ずもあれと心より神に祈らめ、神に、噫
来ずもあれと神に祈らん。

アルフレッド。望みたゆいまはや、望みたゆいまはや、な
げきもかひぞなき、我望たえはてぬ、望みなきえはて
ぬ、氣も狂ひ、望なし、死よ来れいざとく。

男爵。刃もて必ず罪されぬべし、必ず罪をうけん。

外一同。氣を落しそ、氣を落しそ、皆も悲し、切なる心
知る。（以上同時に唱ふ）

アルフレッド。忘れんとは、つとむれど忘れえぬ我思ひ、
憎みてもなほ胸に、浮びくる汝がさま、口惜しく憎

みてもなほ胸に浮びくる姿、忘れんとはつとむれどわ
すれえぬ我が思ひ、憎みても猶胸に浮びくる姿、浮び
来る汝が姿、口を惜しくく、浮び来る汝が姿、口
惜しくく、我望たへはてぬ死よ来れいざとく。

ジェルモン。思ふ心深くも、あはれ今は永久とほの別離わかれ！
むごしと思へど、とはの別れぞ、とはの別れぞ、思ふ
心ふかくも、あはれ、今はとはの別れぞ、むごしと思
へども、永久の別れぞ、とはの別れぞ。二人が思ひ深
くとも、いまはや別れぞ、いまはや別れぞ。

男爵。あだ返さん、すみやかにめぐり合はゞわれ刺さ
ん、めぐり合はゞ我刺さん、あだをうたん必ず、刃を
もて刺しくれん、必ず、かならず刺しくれん、必ずあ
だ返さん、すみやかに、めぐり逢はゞ我刺さん、めぐ
り逢はゞ我刺さん、あだをうたん必ず、刃をもて刺し
くれん必ずかならず、刃をもて刺しくれん必ず、われ
さしくれん必ず、必ずくく、われさしくれん必ず、
必ずくく、刺しくれん必ず。

医師、侯爵。友ゆゑに悲しみも、うさも消え氣もはれん、
友ゆゑに悲しみもうさも消え氣もはれん、うさもきえ
氣もはれん、そのなげきをば忘れよや、忘れよく
く、そのなげき、わすれよ。

合唱隊。悲しみをわかつたん、悲しみをわかつたん、そのなげきわすれよ、忘れよ、悲しみをわかつたん、悲しみをわかつたん、そのなげき、忘れよ、あ、君！（此の時バスとテノールは「そのなげき（『き』）をば忘れよ」と唱ふ）あ、君！ そのなげきをばわすれよ、わすれよ！

ギオレッタ。君は忘るも、君は忘るも忘れじ我は！ 君は忘るも、君は忘るも、忘れじわれは！ あ、君よ！ 君もし忘るも我身は、あ、君よ！ 我身はわすれじ、我身は忘れじ。

フロラ及ガストン。そのなげき、忘れよ、そのなげき忘れよ、忘れよ、そのなげき忘れよ、わすれよ、わすれよ、あ、君！ 忘れよ、あ、君！ 忘れよ、忘れよ、忘れよ。

第三幕 ギオレッタの寢室

ギオレッタの寢室、後の方、半ばカーテンを引きたる寢室、窓は閉しあり。寢室の側に小さき机。其上に水を入れたる水さし、グラス、及種々の薬載せあり。舞台の中央に化粧卓、其側にソファ、其他の家具、夜の灯火と

ぼ（『ぼ』）せしまま。左手に入口、燧炬燃へあり。ギオレッタ寢台の上に横はり居る。

十六 永遠の別離ぞ

（宣叙調詠嘆調。絶唱）

ギオレッタ。（目を覚して）アンニナ。

アンニナ。呼びしか？

ギオレッタ。寝り居りしや！

アンニナ。ゆるしませ。

ギオレッタ。水をたまへ。（アンニナ水をやる）もはや朝

なるか。

アンニナ。はや、八時！

ギオレッタ。窓を開きてよ！（アンニナ窓を開き街路を見る）

アンニナ。医者ぞ来ます。

ギオレッタ。お、われは立つことかたし（ギオレッタ

起たんとして能はず）アンニナに扶けられてやうく

ソファの処にゆく、医者折りよく入り来りてギオレッタを扶け座につかしむ）

ギオレッタ。嬉しや。よくぞ来ませる。

医師。(脈をとりて) 気持はいかに？

ギオレッタ。きのふより心地よろし——されど別れの時は来ぬ。心安むるは祈りのみ。

医師。ねむりしか？

ギオレッタ。よくねむりたり。

医師。気落ちせそ。此病ひやがて癒へん。

ギオレッタ。望はなきに。なぐさめたまふよ——

医師。(握手して) 今宵また来ん。

ギオレッタ。必ずよ。(医師退場、アンニナついてゆく)

アンニナ。(医者ママに) まことよきか？(早口にて囁やく)

医師。最後の時はやがて来ん(医師退場)

アンニナ。いかにぞ？

ギオレッタ。あの物音は？

アンニナ。あれは踊りの物音ぞ——

ギオレッタ。楽しきむれと葬式とむひとうちまじらん。金はい

かほどありや？

アンニナ。(引出を開き計算して) 二拾ルイ——

ギオレッタ。拾ルイは汝にとらせん。

アンニナ。残るはわづか——。

ギオレッタ。されど足りなん——手紙もや……………見て

来よ——。

アンニナ。など？

ギオレッタ。急げや、我を思はゞ。(アンニナ退場。ギオレッタ懐中より手紙を出し、読む。弱き声調にて。)

「よくこそ御約束守らせ給ひぬ。男爵が決闘の手傷は今はこちらよし、他国のそらなるアルフレッドは御心尽しのかずく承りなば御許し乞ひに参るべし。いづれは此身も訪ひまゐらせん。返すくも御体をいとはせたまひ、末の日の幸をこそ、——ジェルモン」(猶言葉をつゞけて)……………でもおそい……………(立ち上り)待ちに待ちし君は見えず(鏡を見る)変りはてしよ。癒ゆると医師はいへども、あゝやつれぬ。

希望のぞみたえぬ。

永遠とこの別離わかれぞ、悲しわが世、

花も散りて日蔭うすれ、

我望いまは消えはて、

はぐくみし夢も破れぬ——

憂きは——世や！ 噫——、

神こそは恵みたまはめ——、

人はつらくも神は恵まん。

あゝ、のぞみは消ゆ、希望のぞみはほろびぬ——。

憂ひ楽しみ、共に消えゆき、

やがて墓場にひとり眠るか——
訪ふ人もたえて無ければ

あざけりは追ひも来ざらめ——。

花東はなもなく——あゝ——、

神こそは恵みたまはめ。

人はつらくも神はめぐまん。

あゝ望は消ゆ、望はほろびぬ——。

十七 花の行列通るぞや

(酒神祭の合唱)

(表の方にて) 花の行列通るぞや。なげよ花を踊れ人々、
これぞまこと国の花、歌ひはやせにぎやかに。人々出で
見よ、あれ牛がねりゆく。牛がねりゆく。アジヤ、スフ
リカ〔「アフリカ」〕よも越えじ。此賑ひたぐひなや。と
くいで来よ、いざや共に、踊れ歌へことほげよ。人々出
て見よ、あれ牛がねりゆく。牛がねりゆく。牛がねりゆ
く。花の行列とほるぞや、なげよ花を。踊れ人々、いざ
やともに歌へよや、踊れや歌へ——。

十八 街を離れ静かなる処へ

(宣叙調及二部合唱)

(アンニナ急ぎ入り来る。)

アンニナ。(ためらひて) おゝマダム——。

ギオレッタ。なにぞや——。

アンニナ。いかにいまは、ここちよきか?。

ギオレッタ。などで聞く?。

アンニナ。おどろきたまひそ。

ギオレッタ。なに故ぞや?

アンニナ。思ひかけぬこと、きかせんため——。

ギオレッタ。よきこと?——なにぞ?。

アンニナ。おゝマダム。

ギオレッタ。アルフレッドにあひたりや? (アンニナう

なづくアルフレッド登場) はやませしか。アルフレッ

ド。(兩人相抱く) いとしアルフレッド、いとしなつ

かしアルフレッド!

アルフレッド。いとしギオレッタ、いとしなつかしやギオ

レッタ。ゆるしてよ此日頃。

ギオレッタ。ゆるさでや、ありぬべき。

アルフレッド。いまは、はやなにも二人が仲はなし得

じ。

ギオレッタ。今日までと定まるも惜しきは我命ぞ。

アルフレッド。悲しみを払ひさり、わが罪をゆるせ。

ギオレッタ。君はなほ許し乞ふか、罪はみなわれぞ。

アルフレッド。悪魔も天使も二人が仲をば——。

ギオレッタ。悪魔も天使も二人を——。

アルフレッド。いまは——。

ギオレッタ。いまは——。

アルフレッド。いまは——。

両人。はなすことかなはじ。——

アルフレッド。町を離れ、静なる処へとつれゆかん、汝が

病やがて癒え、幸福はかへり来ん、希望にかぐやく幸

福はかへり来ん。

ギオレッタ。町を離れ静なる処へと、いざゆかん。——

アルフレッド。おほ。

ギオレッタ。我病、やがて癒え幸はかへり来ん。望にかぐ

やく幸はかへり来ん。

アルフレッド。町をはなれ、いざやゆかん。

ギオレッタ。悲しみははや去りぬ。病ひ癒えなん。

アルフレッド。さなり、さなり、二人が仲たれかさかん。

ギオレッタ。悲しみははや去りぬ。わが病いえなん。

アルフレッド。誰かさかん。悲しみを忘れよや。

ギオレッタ。悲しみははや去りぬ。我病ひ我病ひやがて

いえなん。

アルフレッド。汝が病ひ。汝が病ひいえなん。

ギオレッタ。悲しみははや去りぬ。我病ひいえなん。

アルフレッド。二人が仲たれかさかん。

ギオレッタ。悲しみははや去りぬ。我病ひいえなん。

アルフレッド。誰かさかん。かなしみをわすれよや。

ギオレッタ。悲しみははや去りぬ。我病ひ、我病ひ、や

がていえん。

アルフレッド。汝が病ひ。汝が病ひ。やがていえなん。

両人。嬉しや、悲しみは悲しみははや去りぬ。悲しみ

ははや去りぬ。

ギオレッタ。我病ひやがていえなん。

アルフレッド。汝が病ひやがていえなん。

ギオレッタ。君よ、共にさひはいを、御神に謝しなん。

(倒れかかる。)

アルフレッド。思はざる喜びに我心驚ろきしばかりぞ

や——。

(疲れはてて寝台の上に倒れ伏す。)

アルフレッド。(腕にて扶けおこし) いかにギオレッタ——。

ギオレッタ。いささかの、つかれぞや。わが望、かへり来ぬ。

アルフレッド。(絶望的に) いたまじや。

ギオレッタ。さらばアンニナ衣物此処へ。

アルフレッド。やめよ、しばし。

ギオレッタ。(立ちて) いな、はやよし。(アンニナ衣服を与へる)

(ギオレッタそれを着けんとするも衰弱のため。能はず余儀なく止め。衣物を落して落胆の叫をもらす。)

ああ駄目か——(床の上に倒る。)

アルフレッド。いたまじや(アンニナに) 医師を呼べ。

ギオレッタ。(アンニナに) 告げよ、今はアルフレッドかへり来て、此処にあり。今一度命ながらへ、昔しにかへりたや、(アンニナ退場ギオレッタ、アルフレッドに) 君を見て癒えもせず、癒すもの世になきか。(立上りこらへかねて) あゝ、かく若きに死にゆく身かや——、花はいたづらに、しばみてゆくか、望はたばかり、運命はつらし、今は空しく別れゆくよ、アルフレッド。われも、涙の止めがたしや。此世の一つの望もたへぬ。後の世までも二人が仲は変ることなし。共に死なむ。

ギオレッタ。おゝ、いまこそ別れか——。

アルフレッド。あゝギオレッタ、しづかに——。

ギオレッタ。いまこそ別れか——。

アルフレッド。ギオレッタ、しづかに——。

ギオレッタ。幸をよそに——。

アルフレッド。われは此処におゝギオレッタ、静に、われは此処に、われは此処に此処に。

ギオレッタ。希望はかへるを我は逝くか。あゝかく若きに、死にゆく身かや、花はいたづらにしばみゆくか。

望はたばかり、運命はつらし。今はむなく別れゆくよ。

アルフレッド。ギオレッタ静にギオレッタ——、おゝギオレッタ静に我は此処に。ギオレッタ静に。我は此処に我は此処に。ギオレッタ静に。

ギオレッタ。いざさらば、いまぞわかれ。さち幸をばよその他処に別れぬ。

アルフレッド。われは此処に、われは此処に、われは此処に。

ギオレッタ。さらば——アルフレッド。いまこそわかれぬ、さらば——さらばぞさらばぞ。

(寝台に倒る)

アルフレッド。われは此処にギオレッタ、われは此処にぞ、
われは此処に、——共に死なばや——。

十九 いざ我遺物ぞ！

(終曲)

(アンニナ、ジェルモン、及び医師入り来る)

ジェルモン。おゝギオレッタ！

ギオレッタ。おゝ君！

アルフレッド。父上か！

ギオレッタ。よくぞ来し！

ジェルモン。わが娘に、君をばせんと、たづね来しぞ！

ギオレッタ。おゝ、遅かりき！ されど嬉しや (父を抱

く) (医師に) 見よ君よ、いまはの時に幸は来りぬ。

ジェルモン。なにとや！ (ギオレッタを見る) まこと、

あゝ。

アルフレッド。見ませ父君！

ジェルモン。あはれ！ 涙に我心苦！ むるな、御神の

御声か彼がことば！ (ギオレッタ手箱を開き中よりメ

ダリオンを取り出す) 無理なることを頼みしは、わが

罪ぞ！

ギオレッタ。近づきてきけや此心！ (うつろなる声にて)

アルフレッド！ 取りたまはれ！ いざわが遺物ぞ！

我なきのちの思ひ出に！

アルフレッド。死なせじ、君は永久に我物、此苦しみに我

はたえめや、いかでわかれん。

ジェルモン。たふとしや、人のために身をば殺すか、其

苦しみわれぞうけめ。

ギオレッタ。いつかやさしきをとめに逢ふとき、心あひ

なば、君が妻と定めて、これを与へよ、我は神に彼女

が幸長かれと祈らん。

ジェルモン。涙かるゝまで泣かばや、かるるまで泣かば

や

アンニナ及医師。涙のかるるまで——われなげかん。

アルフレッド。神ぞ召します、憂世すてて神のそばに、来

ませと。

アルフレッド。なにとて死なすべきぞ。

ギオレッタ。これを与へよ。

アンニナ及医師。神は召します、憂世はなれ、神のそばに！

アルフレッド。神召したまはば我も共にゆかめ、われも共

にゆかめ。

ジェルモン。神は召します、憂世はなれ、神のみ側に。

ギオレッタ。我は祈らん、ふたりが幸を、天の彼方に。

(気がついて) 不思議!

一同。あゝ。

ギオレッタ。(話すごとく) いたみは消えはて、苦しみに
ま去りぬ、生命いのちまでも復活かへりするか、おゝいま、おおい

ま新なる命 (ソファの上に倒る)

アンニナジェルモン及医師。神よ!

一同。おゝ!

アルフレッド。ギオレッタ!

アンニナ及ジェルモン。こときれぬ!

医師。(最後にギオレッタの脈をとりにて) 逝きぬ!

残りのもの一同に。悲しや!

(幕)

*本研究はJSPS科学研究費(二三七二〇〇八四)の助成を受けたものです。

《注》

- (1) オペラ座と東京オペラ座の『椿姫』については、中野正昭「歌劇『椿姫 (La Traviata)』——検閲台本にみる浅草オペラの演劇性」、『早稲田大学演劇博物館グロバールCOE紀要 演劇映像学二〇〇八』第二集、二〇〇九

年三月)を参照されたし。

(2) プログラムではこれら配役の他に「外二友人達、闘牛者及ジブシイ等、大勢」とある。

(3) 小松耕輔『音楽の花ひらく頃』音楽之友社、一九五二年、一二四頁。

(4) 現在ではこの「宣叙調」という言い方は用いられていないが、例えば森鷗外邦訳の『即興詩人』(一九〇二・明治三五年、春陽堂)には「その天然の美音もて、百鍊千磨したる抑揚をその宣叙調(レチタチイヲオ)の上にあらはしつ」とあり、明治大正期に一部で使用された訳語である。音楽雑誌等を見る限り、大正半ばには「レチタチイヴォ」等のカタカナ表記の方が多く、「宣叙調」の訳語は使われなくなったようである。

資料

公演プログラム (早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵 10922-30-1918-01 (02))

ROSI'S OPERA

AKASAKA-MITSUKE

TELEPHONE 6977 (SHIBA)

From Feb. 1st,

La Traviata

Grand Opera in 3 Acts and 4 Scenes

BY
G. VERDI

Translated by Mr. K. Komatsu
Produced by Mr. G. V. Rosi

Cast

Violetta.....	Miss B. Ando
Flora.....	Miss F. Okamura
Annia.....	Miss K. Inoue
Alfredo.....	Mr. R. Taya
Germonet.....	Mr. M. Mogui
Gastone.....	Mr. K. Hotta
Baron Douphol.....	Mr. S. Kawai
Marquis D'Obigny.....	Mr. S. Magui
Dottore Grenvil.....	

Chorus of Friends, Matadors, Picadors and Gipsies.

Director of Orchestra Mr. Masao Shinohara

La Traviata

The story upon which "La Traviata" is based is that of the book and play "La Dame aux Camélias" of the younger Dumas, the story which is familiar to the Japanese stage under the name of "Tsubakibime." The three acts of the opera present the principal incidents of the play and book. A gay party is in progress in the house of Violetta (Marguerite Gauthier in the original story), a Parisian courtesan. Alfredo, a young man of respectable Provençal family, who loves the woman, joins in the merry-making; his love is passionate and earnest, and is met by the love of Violetta, who at his solicitation agrees to abandon her dissolute life and live with him alone.

In Act II the pair are found housed in the suburbs of Paris.

Alfredo learns that Violetta has sold her city property to maintain their country home, and goes to Paris to recover it; he returns to find his companion gone. In his absence Germonet, Alfredo's father, had visited her and persuaded her, by appeals to her love and sympathy for his son to abandon him. She returns to her old life in the city. There, at a ball given by one of her associates, Alfredo finds her again, overwhelms her with reproaches, and ends a scene of excitement by denouncing her publicly and throwing his gambling gains at her feet. In the last act Violetta dies in the arms of her lover, who had learned of her sacrifice for his family and hurried to her side to find her in the last stages of consumption.

昭和七年九月七号
大阪毎日新聞

ローシー・オペラ

伊沃利 大家ウエルテイ 傑作

大歌劇 樺 姫

(トゥラギア)

全三幕・四巻

赤坂見付ロイヤル館電話六九七七

(毎夕八時開演)

脚本 伊沃利
翻譯 相馬 香泉
音樂指揮 香泉
監督 相馬 香泉

- 主演者レック
- フローラ
- アンニチ
- アルフレッド
- ジェルモン
- ガストーネ
- 男爵ドワイル
- 侯爵ドビニイ
- 侯爵クレンギル
- 外ニ友人連、開演者及ブアイ等

- 指揮 相馬 香泉
- 監督 相馬 香泉
- 主演者レック
- フローラ
- アンニチ
- アルフレッド
- ジェルモン
- ガストーネ
- 男爵ドワイル
- 侯爵ドビニイ
- 侯爵クレンギル
- 外ニ友人連、開演者及ブアイ等

28612

◎ 樺姫 (La Finland) 略語

第一幕 第一場

巴都の王アルフレッドの御前、若い時侯に居られたイ
一人は、昔は、大いなる愛を以て、相馬 香泉 香泉 香泉
る此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
に、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
は、大いなる愛を以て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
心か、大いなる愛を以て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
す。

第二幕 第一場

巴都の王アルフレッドの御前、同じ王國の、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
レ、巴都の王アルフレッドの御前、同じ王國の、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
フ、巴都の王アルフレッドの御前、同じ王國の、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
で、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
す。

第三幕 第一場

巴都の王アルフレッドの御前、同じ王國の、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
れ、巴都の王アルフレッドの御前、同じ王國の、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
は、大いなる愛を以て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
心か、大いなる愛を以て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
す。

第四幕 第一場

巴都の王アルフレッドの御前、同じ王國の、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
は、大いなる愛を以て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
心か、大いなる愛を以て、相馬 香泉 香泉 香泉、且つ又、此の世に、コロン、最初の最愛の王で、相馬 香泉 香泉 香泉
す。